

論 考 想

小林 登「子ども学」賞の 誕生とその未来

沢井佳子（日本子ども学会常任理事、小林登「子ども学」賞 運営委員）



2023年、日本子ども学会に小林 登「子ども学」賞が誕生します。日本子ども学会の創設者で、初代理事長である小林 登先生のお名前を冠した、子ども学の学術賞です。2003年11月に、日本子ども学会の設立集会在、東京の白百合女子大学で開かれてからちょうど20年。今年9月に、本学会の学術集会・第19回子ども学会議が、同じ白百合女子大のキャンパスで開催され、その折に第1回小林 登「子ども学」賞の授賞式がおこなわれる予定です。

受賞候補者は、会員の方から推薦された個人や団体であり、本賞の運営委員会へ3月末までに推薦書が提出された方々です。そして、4月から8月にかけて審査委員会で審査・選考がなされたのち、日本子ども学会理事会の承認を経て、受賞者が決定されます。今年子ども学会議は、本賞の最初の受賞者をたたえる、記念すべき学術集会となるはずで

お別れの寂しさと 賞の発案

小林 登「子ども学」賞が誕生するまでの経緯を振り返りますと、その発案がなされたのは2019年12月27日夕刻に開催された、日本子ども学会常任理事会でした。議題として彦根における第17回子ども学会議の検討等が予定され、榊原理事長、安藤副理事長、太田副理事長はじめ11名の常任理事が集ったのですが、

会議は哀しみと寂しさに包まれていました。前日12月26日の晩に小林 登先生が、92歳のご生涯を終えられたという訃報に接して間もない時であったからです。次年度子ども学会議について話し合う時も、かつて常任理事会で多くの提案をなさった小林先生の、朗らかな顔が思い浮かぶのでした。

「一番嬉しかったことは何ですか？」と先生にお尋ねした時のことを、私は想い起こしていました。「それは、武見記念賞をいただいたこと。受賞理由が『子ども学』であったのが、嬉しかった」と、先生が満面の笑みでお答え下さったのは、2015年11月の米寿のお祝いの頃でした。小児科医として、既に国内外の榮譽ある賞や勲章を数多お受けになった先生も、「子ども学」を体系づけるご業績が取り上げられ、受賞という形で高く評価されたことを喜んでいらしたのです。その懐かしい思い出に促されるように、「小林 登先生のお名前を冠した、子ども学の賞を創りたいものですね」と、私は会議の席で申したのですが、そこにいらした常任理事の方々がご賛同くださり、早速に、賞のプランのたたき台をつくる宿題を頂くことになりました。小林 登先生のお名前と子ども学という体系…ふたつの名称を結ぶ賞には、どのような骨格と役割が求められるのか……を考え始めた年の瀬でした。

その4日後の大晦日にとりおこなわれた、小林先生の告別式では、在りし日のお姿が、フィルムの断片を次々につないだ映画のように、臉に浮かびました。

1987年の夏、国際行動発達学会に集った海外の研究者らが、国立小児病院の研究センターを訪ねた時、白衣の小林先生は、赤ちゃんのエントレインメントの動作解析について、機器を指し示しながら澆刺と解説していらしたのです。工学のテクノロジーを導入して、ビデオ映像、ポリグラフ、サーモグラフィーなどを連携させ、親子のコミュニケーションを生理的にも社会的にも分析する研究は、「子ども学」研究のモデルと

いえるものでした。

また、1988年にお茶の水女子大大学院へ、先生が特別講義にいらした時、大学院生で妊婦でもあった私に、医療文化人類学者のDana Raphael先生を囲む研究会を企画するようにと、お任せくださったことは忘れ難い思い出です。文化人類学の原ひろ子先生ほか、多彩な専門家を集めて、Raphael先生のドーラ研究や子どもの虐待の問題について議論し合った研究会は、まさに子ども学会議の雛形のようなものでした。

このように専門の垣根を越えて話し合い、知識を共有する喜びに満ちた時は、先生が所長でいらしたチャイルド・リサーチ・ネットの研究会をはじめ、プレイショップやメディアキャンプなどのイベントでも花開き、2003年の「日本子ども学会」の設立で実を結びました。2004年9月の早稲田大学国際会議場における第1回子ども学会議の基調講演「子ども学とは何か—育つ育てる」をお話しになる小林先生の晴れやかなお顔。座長を務めた私の心も喜びに満たされました。臉に映る、名残惜しい面影を追って、2019年最後の日に、先生をお見送りしたのです。

パンデミックのトンネルを走るオンライン

年が明けて2020年、小林登先生のお名前を冠した賞の創設を、令夫人の小林滋子さまにご承諾いただいた頃、テレビのニュースは、中国の武漢で広がる感染症が深刻であることを報じていました。「昔の小児科医は、感染症の子どもを治すのに忙しかったけれど、今の小児科医は、子どもの心の問題で忙しい。だから医者も、いろんな専門家と一緒に子どものことを話し合わないといけないね」と、小林先生はおっしゃっていましたが、百年ぶりのパンデミックのトンネルは、すぐそばまで近づいていたのです。国内の感染者数が毎日報じられるようになると、会合は次々とキャンセルされ、春以降は、保育園や学校も閉じられて、「危機にある子どもたち」の育成環境が、世界的な問題となりました。

学会の会議もオンラインとなり、東京オリンピック2020と同様、第17回子ども学会議の開催も延期される中、とにかくゴールを定めようと、「2023年の子ども学会議で第1回の授賞式を開催する」という目標を立て、理事会に承認していただきました。

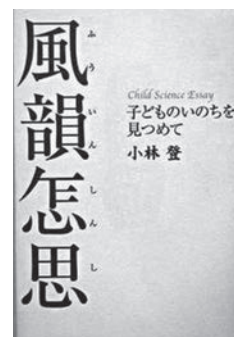
そして、学会事務局と理事長の榊原先生を中心に、

賞の準備委員会を組織し、理事の方々からも情報を募って、既存の学術賞の内容や規程についての下調べが始まりました。賞の規程については、理事の安倍嘉人先生が、元判事で弁護士というお立場からご助言をくださり、公正な授賞事業のための組織づくりがオンラインで始まりました。

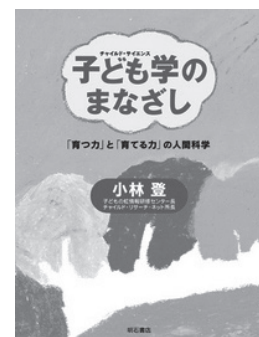
ヒューマンサイエンスとしての「子ども学」のパノラマ

2021年10月には、第17回子ども学会議が1年遅れで彦根の滋賀県立大学で開催され、対面とオンラインのハイブリッドで準備委員会が開かれました。賞の名称を小林登「子ども学」賞と定め、賞の趣旨の起草に取りかかったのです。この作業は、小林先生が構想なさった「子ども学」をどのような景色のパノラマで描くのか…を話し合う機会となりました。「子ども学は、人間のすべてを科学という基盤からとらえる人間科学である」という、小林先生のおっしゃる「人間科学」という言葉が、人文科学の類語だと誤解されないように示す必要もありました。

海洋軟体動物を研究する英国の神経生物学者、J. Z. Youngが、人間の生物的側面も社会的側面も対象にした研究を包括し、「ヒューマンサイエンス」と呼んで体系化したこと…それが「人間科学としての子ども学」という小林先生の構想へ受け継がれていることは、小林先生のご著書『風韻怎思—子どものいのちを見つめて』（小学館）や『子ども学のまなざし—「育つ力」と「育てる力」の人間科学』（明石書店）の中で述べられています。実際、過去3年にわたるCOVID-19のパンデミックの経験を通して私達は、生物的存在としての子



『風韻怎思—子どものいのちを見つめて』（2005年）



『子ども学のまなざし—「育つ力」と「育てる力」の人間科学』（2008年）

どもをよく観なければ、社会的存在としての子どもをケアできないことを痛感し、子どもの人間科学において、自然科学的な基盤が重要であることを改めて学んだわけです。

なお、先ほどの J.Z. Young は、数学者でコンピュータ科学者の A.M. Turing との交流を通じて、脳の機能を神経細胞のネットワーク・システムとして考え、生命活動におけるプログラムの重要性を 1970 年代から唱えていました。小林先生は Young と同様のシステム論に基づいて、子どもを「生命のシステム」とみなし、子どもの心身内部のネットワークと外部の社会のネットワークとの間の、情報の行き来に注目なさっていました。それは、情報学的な「子どもモデル」といえるものでした。

「ヒューマンサイエンスとしての子ども学」、そして「生命のシステムとしての子どもを探究する子ども学」。このように幅広い領域をカバーする子ども学の、研究と実践の仕事が、小林 登「子ども学」賞の対象となることを示してゆこうと、準備委員会の中で議論と検討が続けられました。

かくして小林 登「子ども学」賞の趣旨は、次のような文章にまとめられたのです。

本賞は、自然科学や人文科学を包括し、子どもにかかわる学際的・環学的な学問領域において、子ども研究を深め、創発する業績、並びに、子どもの生活環境を豊かにする育成デザインの開発や、子どもの問題の解決に寄与する実践などに すぐれた業績を挙げた人々（個人あるいは団体）を顕彰するものです。そのことにより、人間科学に関する多領域の関係者でそれらの成果を共有し、小林登先生が提唱された「子ども学」への社会的関心を高め、子どもの幸せに資する知識の深化や、社会システムの構築へと つなげてゆくことを目的とします。

賞が未来へ届けるものは

2022 年 10 月に第 18 回子ども学会議が岐阜の東海学院大学で開催された時の総会で、小林 登「子ども学」賞の創設と、学会員から受賞候補者の推薦を募ることが発表され、11 月から賞のウェブサイトで推薦の受付が始まりました。そして 2023 年 4 月から、審

査委員会（安倍嘉人、安藤寿康、内田伸子、木下 真、小林美由紀、竹林洋一、渡辺富夫）と、運営委員会（榎原洋一、一色伸夫、太田美代、沢井佳子、所 真里子、劉 愛萍）[敬称略]が活動を開始し、初めての受賞者を選考する作業に入ります。賞という器の誕生です。

さらに 2023 年 4 月には、こども基本法が施行され、こども家庭庁が設置されます。子どもについての政策論議が盛んになる今こそ、「子どもについて広く話し合うための、共有の基盤となる学問体系をつくる」という小林先生のご遺志に応える人が求められます。

新しく誕生した小林 登「子ども学」賞が、一人ひとりの子どもに寄り添って考える人を励まし、望ましい育成環境を未来へ届ける一助となりますようにと願ってやみません。



〈プロフィール〉

沢井佳子（さわい・よしこ）

チャイルド・ラボ所長、(一社)日本こども育成協会理事。認知発達支援と視聴覚教育コンテンツの開発を専門とする。お茶の水女子大学大学院修了。専攻は発達心理学。幼児教育番組『ひらけ！ボンキッキ』（フジテレビ）の心理学スタッフ、お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 研究員、静岡大学情報学部 客員教授等を歴任。2000 年に個人事務所のチャイルド・ラボを設立して以来、子どもむけの映像や玩具などのコンテンツ開発と監修に携わる。幼児教育シリーズ『こどもちゃれんじ』（ベネッセ）の「考える力」プログラム監修。幼児教育番組『しまじろうのわお！』（テレビ東京系列）監修（国際エミー賞 2015 ノミネート、アジアテレビ賞 2018 受賞、日本賞 2018、2021 幼児向け番組優秀賞受賞）。ハッピーセット玩具の監修（日本マクドナルド）。編著書に『6歳までの子育て大全』（アチーブメント出版）、『3さいの本』全 8 冊（講談社）ほか監修した本やデジタルコンテンツは多数。日本子ども学会常任理事。人工知能学会「コモンセンスと感情研究会」幹事。



理事長対談

小林登先生の大学時代の思い出

小児医学の枠を超え、 子どもの未来を 見つめていた

小林美由紀 × 榊原洋一

(小児科医)

(小児科医)

司会：木下 真 (福祉ジャーナリスト)



小児科医である榊原洋一先生と小林美由紀先生は東京大学医学部出身。3年前に逝去された日本子ども学会の小林登名誉理事長のもとで小児医学を学ばれました。学生時代には医学にとどまらない幅広い視野の講義に刺激を受け、医局員時代には上下関係にとらわれることなく、若手の試みを応援してくれる姿勢に大いに励まされたといいます。二人が20代の頃、小林登先生はまだ40代の新進気鋭の医学部教授。両先生が小児科医として歩み出す上で、大きな影響を受けたという恩師の思い出について語っていただきました。

最初の2年間はリベラルアーツを学ぶ

——医学部というと、身につけないといけない知識や技術が山ほどあって、学部時代は勉強漬けなのではないかというイメージがあるのですが、当時の東京大学医学部はどんなところだったのか、まず6年間の学習スケジュールを教えてください。

榊原：医学の授業が始まるのは3年生からで、東大では最初の2年間は駒場キャンパスで教養課程です。私の場合は、医学や理系の選択科目はほとんど取らずに、例えば文化人類学、井原西鶴研究、ラテン語など、教養課程でないと学べないような授業を好きに選択していました。ワンダーフォーゲル部に所属して山登りなどもせっせとしましたし、かなり遊んでいたというか、自由な時間を満喫していました。

医学の勉強は3年生から始まるわけですが、いきなり学生に患者さんを触らせるわけにはいきませんから、まずは基礎医学の勉強です。病理学、組織学、解剖学、生化学、生理学、寄生虫学、公衆衛生学などを2年間でひと通り学びます。そして、最後の2年間は実習です。実習は2種類あって、一つはポリクリといって外来患者を診るのと、もう一つは病棟実習、指導医のもとで入院患者を診るのです。これらの臨床実習は講義と違って、さぼることはできません。

卒業の年には、二つの鬼門があります。一つは卒業試験。難しくはないのですが、27科目を全部一度にやるのです。記憶しないといけないことが多いので、

それなりに大変です。臨床内科Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、神経内科、外科、整形外科、小児科、眼科、耳鼻科など、あらゆる科目があります。

卒業試験以上に大変なのは、医師国家試験です。2日間かけてやるのですが、これに通らないと医者にはなれませんから、試験の前には勉強会などを開いて、みんなで試験に備えることもやりました。

私立医大では国家試験の合格率が大学の評判につながるの、学生に教官がついて、合格に責任をもつようなこともやるみたいですが、東大では周りからプレッシャーをかけられるようなことはありません。そのせいか、合格率は全国トップではなく、80数パーセントぐらいだったと思います。

小林：私は理科二類から医学科に行きましたから、榊原先生とはちょっと違うのです。

榊原：理科二類から医学科に進学するには、教養課程の成績がすごく優秀でないとダメなのですよ。

小林：そうなのですが、私はずっと数学が得意でなかったもので、ものすごく苦労したんです。それと物理がダメだった、物理は赤点取ったりしてましたから。赤点だと50点。医学科に進学するには、すべての科目で80点ぐらい取らないといけないのです。

それで、いい成績が取りやすい授業をいっぱい選択していました。医学とまったく関係ない授業。ラテン語、ギリシャ文学、心理学、工学、法学の授業も取りました。専門に行く前に2年間かけて、いろいろな教養を学ぶというのは、あれは東大独特だったかもしれ

ません。今振り返ると、いい時代でしたね。医学以外のことを学ぶ時間は、ものすごく貴重だと思います。

榊原：私の娘は私大の医学部に進みましたけど、リベラルアーツ系のことを学ぶ時間が減って、初めから医学の勉強をする傾向になってきているようです。何を学んでもいいという時間を、若い時には与えてほしいものです。

わかりやすく奥の深い講義

——小林登先生の授業は、他の教授たちとは違っていたと聞いていますが、どんなふうに違っていたのですか。

小林：医学科の先生の講義は、それぞれの先生がご自身の研究されているご専門の話を詳しくなさるので。私が一生診ることはないだろうというような、特殊な疾患の話だったりするわけです。そのせいか、医学部の学生は100人いるはずなのに、多くの学生がさぼっていて、教室には30人ぐらいしかいないのです。先生もそのことをわかっているのに、本来は講義で使う資料を100人分用意すべきなのに、いつも30人分ぐらいしかいないのです。それで、なぜか足りなくても補充してくれないのです。

先生方は専門的な知識をできる限り詰め込んで、黒板の端から端までガッツと書いていって、サーと消していくのです。それを、みんな必死になって書き写していく。そんな講義しかなかったのだから、バカバカしくて、私はいつも階段教室の後ろの方から眺めていました。

でも、小林登先生の講義は、そういう先生方とは違ってました。今でも覚えています。まず字が大きい、そして、話がわかりやすい。医学生って、まだ医学の知識なんかろくにないのに、他の先生方はすごく専門的な話をされる。それを、みんな訳わからないと思いつつながら無理して聞いていたわけですが、小林登先生は

誰でもわかるような話をされて、それでいて奥が深い。とても印象に残っています。

榊原：小林登先生は、自分自身はイントロだけ話をされて、あとは誰かに任せるといった講義をされてました。多くの教授は、自分の科のことはすべて知っているんだと言わんばかりに、前日に徹夜してでも入念な準備をして講義に臨むのですが、先生はおおらかで、自身では全般的な話をして、あとは専門知識のある人や若手に任せてしまうのです。また、時には外部の人を招くこともありました。スローウイルス感染症の研究でノーベル賞をとったガジュセック博士や、チンパンジーの研究で有名なグドール博士による講義などは、大変興味深かったです。

先生はすべてを仕切って、支配するやり方ではなく、開放的で、当時としては珍しい周りの人たちを巻き込む感じの講義でした。医学にとどまらず広い視野をお持ちでしたし、若い頃にアメリカやイギリスの医療現場で学ばれたので、海外の情報にも人脈にも通じていました。私がよく言う「小林先生の講義で、青空が見えた」というのは、そういうことなのです。

小林：もともとご自分のことを宣伝される先生ではなかったのだから、海外で勉強したというような話を講義ではなさらないのです。でも、全体の雰囲気として他の先生方とは明らかに違う感じはありましたね。

榊原：医学というと、戦前まではドイツに留学される人が多かったのです。でも、小林登先生は、戦後の早い時期にアメリカに留学されて、その後にはイギリスに行かれた。そしてドイツ流の厳格な医療現場とは異なる、英米系の診療というか、医療のあり方を身に付けてこられたのです。そのせいかもしれませんが、他の先生方とはまるで違って、高圧的なところがまったくなかったのです。

——チンパンジーの話など、医学と直接は関係ない講義を学生たちは受け入れていたのでしょうか。

小林：医学の話よりも、そういった視野の広い話の方がおもしろがりますよね。学生って、まだ医者未満なのです。だから、専門外であっても広がりのある話に興味をわくのだと思います。

榊原：若い学生をインスパイアするような、そのためのヒントを与えるのが小林登先生のやり方だったと思います。当時だって教科書や文献はいくらでもあったので、知識はそれで学べばいいというお考えだったのではないのでしょうか。

小林：教授は医学の最先端の知識を学生に与えようとしますが、学生時代に学んだ知識なんて、実際に医者になった時には半分ぐらいしか役に立たないのです。医学の知識って、10年も経ったら古くなってしま

小林登先生の略歴

年	略歴
1927	東京都世田谷区生まれ
1943-1945	海軍兵学校
1949-1954	東京大学医学部
1954-1959	クリーブランド市立病院・シンシナティ市立大学附属小児病院
1961-1964	ロンドン大学小児病院
1970-1984 (1980-1983)	東京大学医学部小児科教授 (国際小児科学会会長)
1984-1987	国立小児病院 小児医療研究センター 初代センター長
1987-1996	国立小児病院院長
1996-2013	チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)所長
2002-2010	子どもの虹情報研修センター センター長
2003-2013	日本子ども学会理事長
2019	逝去

のです。ただ覚えるよりも、自分で見つけ出したり、作り出したりする姿勢の方が大切なのだと思います。「この子どもにとって、今もっとも必要な治療は何か」、そういうことに知恵を絞れる能力こそが必要とされるのです。

患者である子どもと 家族のような関係づくりを

——医者になられてからは、どんな指導を受けられたのですか。

榊原：思い返してみると、私が小林登先生と東大病院でご一緒したのは2年間しかないのです。私は24歳で医者になって、浜松の病院などを経て、東大に助手として戻ってきたのが5年後の29歳の時。その後31歳でアメリカに行ったのですが、先生は私が日本に戻る前に東大を退職されてしまった。ですので、医療の現場で先生とご一緒したのは29歳から31歳の間の2年間ぐらい。助手や研修医として薫陶を受けたという感じではなかったのですが、小林登先生が作り出している雰囲気は好きでしたね。

例えば、臨床の現場ではチャート・ラウンドというのがあって、患者さん全員について週2回ぐらい、2、3時間かけて担当医がプレゼンして、教授を囲んでディスカッションするのですが、先生は司会としてまとめのようなことは話されても、細かいことはほとんどおっしゃらなかった。静謐なシーンとした中で教授と担当医だけが話をするのを良しとする教授もいますが、小林登先生は自由なディスカッションを望まれていました。

また、教授回診というと、テレビドラマの「白い巨塔」のような仰々しいものを想像するかもしれないけれど、小林登先生の場合は、医長と何人かがついていくだけの小規模なものでした。担当医に質問をして、的を射たことを手短にお話しされるという感じでした。

小林：小児科の病棟実習の時には、「まずは子どもと遊ぶこと」と言われました。子どもとの関係を作り上げないと、けっこう泣かれたりして、そうなると診療などできませんから。私はそういう小林登先生のやり方に惹かれて小児科医を選んだところもあります。

榊原先生がアメリカに行かれています時ですが、「病棟を良くする会」というのができました。何をしたかということ、たとえば入院しているお子さんたちとお昼ご飯を一緒にすることにしたのです。カンファレンスするフロアに絨毯を敷いて、お膳を出して、子どもが親御さんと一緒に自分の食事を持ってきて、私たちも自分たちで買って来たお弁当を持ってきて、そこに小

林登先生も加わるんです。それをすごく自然な形でやられていたのが印象的でした。

先生のもとで小児科医としての研修を受けたことは、私の人生の中でもっとも大きなことだったと思っています。医者最初の2年間はものすごく重要で、私はそこできちんとしたことを学ぶことができたので、その後の自分の診療のスタイルが決まったと思っています。

——治療のノウハウよりも、小児科医としての心構えとか、子どもとの関係づくりを学ばれたということですか。

小林：そうですね。東大医学部の附属病院は、主に小児がん、神経の病気、心臓の病気という三大疾患のお子さんたちが入院していて、どれも命にかかわるような重篤な病気なのです。

親御さんが付き添う場合は、病棟が生活の場のようになっていました。私たちがいた頃はキッチンもあって、親御さんが子どもの好きなものをそこで作ることもできました。それから面会を制限することで症状が悪化してしまうこともあるので、感染症さえなければ、親でもきょうだいでも面会できるようにしていました。

私の研修医時代、研修医と患者さんとの距離はとて近かったです。家族みたいでした。私が小児がんや白血病の子どもさんを専門に診ていたこともありますけど、いまだにその頃の患者さんたちとお付き合いがあつて、就職した、結婚した、子どもが生まれた、というように人生の節目節目でご報告いただける関係です。

病院の中が人生のすべてになる子どももいるわけですから、イベントもクリスマスだけではなく、夏祭りもやったし、新幹線に乗ったり、開園間もないディズニーランドに行ったり、思い出したら切りがないぐらい、楽しい思い出作りをしました。患者さんのためだけではなく、研修医たちも楽しんでいましたね。

若手の新しい試みを見守っていた

榊原：私たちの後輩は、人工呼吸器をつけていて病室の外に出るのが難しい子どもを外に連れ出すこともやっていました。いい意味でエスカレートして、人工呼吸器をつけたままゴムボートに乗せて波乗りやったりね。

小林：温泉に連れて行って、一緒に湯船に浸かって、1泊してくるなんてこともありましたね。

榊原：私が病棟医長の頃は、そういう雰囲気を踏襲していたのですが、ある時、看護部から「感染症が広がったらどうするのですか。私たちは協力できません」と、すごく批判されました。

小林：付き添いをつけない完全看護の形のようなこと

を言い始めましたね。

榊原：当時の小児科としては、お母さんに付いてもらうのが、子どもにとって大事だと考えていたのです。でも、もちろん親としては大変なわけだから、欧米では、早い時期から完全介護で寝る時には一人で寝かせようというやり方になっていたのです。しかし、子どもにとってそれでいいのかという反対の立場の「rooming in」という運動も起きるのです。その考え方を提唱されたラヴォール・デイヴィスというイギリス人女性が、東大病院のことをどこかで聞きつけて、わざわざ視察のために来日までされました。

小林登先生は、すでに国立小児病院に行かれていましたが、そういう動きは知っておられたので、重い病気の子どもと看病する親が安心して過ごせる「マクドナルドの家」を国立小児病院に入れようとされたのではないかと思います。

小林：あの頃の私たちは、患者さんと家族のようになる経験をしていて、それがその後の医者人生の方向性を決めたところがあります。

榊原：小林登先生は、そういう新しい試みをいろいろやらせてくれたのです。白衣は権威的で子どもが怖がるので、清潔なら私服でもいいのではないかとという考えがあることを知ると、私服を認めてくれて、Gパンで診療する同僚もいました。そうした試みを研修医が初期体験として経験して、その上で全国の病院に散っていった。そういう感覚はどこかで受け継がれていると思います。

小林：小林登先生は、若い人のやることを受け止める包容力がありました。新しい試みを妨げるようなことは一切おっしゃらない。むしろ面白がっておられた。「子どもを育てるのには、いろいろなやり方があるんだねえ」というような言葉を、しばしばおっしゃっていました。医局に対する信頼もあったのではないかと思います。診療に口を出す教授は多いのですが、先生は任せてくださった。

榊原：確かに、任せられている感じはありました。教授回診の時にも担当医を決して叱らない。親の前で批判するようなことは一切言わない。

医者仲間に聞くと、研修医が患者さんの前で教授から面罵されることがあるそうなんですよ、「なんでこんなことをやっているんだ、君は！」と。教授が自分の威厳を示したいのでしょうけれど、研修医と親御さんとの関係を損なってしまうにきまっているじゃないですか。ひどいですよね。

——テレビドラマでは、そういう場面をよく見ますけど(笑)。

小林：もちろん、研修医はできないことがいっぱいあ

るわけですよ。だから、いくらでも叱ることはできるのです。でも、そこで安直に親の前で叱ったりせずに、信頼して任せる方が若い医者は育つんですよ。

私も1年目から一人受け持ちをしましたが、これがけっこう怖いのです。命がかかっているような重い病気の患者を一人で受け持つわけですから。自分がやるべきことは何なのかを真剣に考えます。一生懸命に考えないと、その子との関係性も生まれません。でも、そうして信頼して任せていただいたことで、医者として大きく育てていただいたなという思いがあります。

榊原：小林先生だって、私たちのやることに不満をもたれていたことはあると思うのです。でも、そういうことは一切おっしゃらなかったですね。

子ども研究のベースにサイエンスを据えて

——小林登先生は、学部の授業でも「子ども学」というワードは使われていたのですか。

小林：いえ、私の時にはなかったです。でも、虐待の話などはされていましたから、医学を超えた視点はお持ちだったのだと思います。虐待から始まって、母子相互作用の研究があり、そして子ども学へと発展していったのかもしれませんが。

榊原：小林先生は、国際的な子ども研究の動きは知っておられていたわけですね。赤ちゃんの能力のことも、母子関係のことも、ドーラのことも、最新の情報として知っておられた。それで、子ども研究をもっと幅広いものにする必要を感じていたのだと思います。だから、新しい試みをおもしろがられていたのではないのでしょうか。

小林：私がスウェーデンに留学した時には、小林登先生はすでに国立小児病院に移られていましたが、ご挨拶に行ったら、すぐにスウェーデンの小児科学会の会長をご紹介くださいました。海外で見聞を広めることをとても応援してくださいました。

榊原：私が医局長の時に東大小児科100周年の事業があって、取りまとめをやっていたのですが、アジアから毎年若いドクターを10人ぐらい呼ぼうということになったのです。10年ぐらい続いたのですが、その時に久しぶりに先生と再会すると、全面的にバックアップしてくださいました。

資金集めのためにいろいろなところに一緒に頭を下げに行きました。「これはいいことだから、がんばりたまえ」と励ましてくださいました。先生は、国際小児科学会会長を4年間おやりになっているので、国際的な活動の大切さをわかっておられたのだと思います。

小林：あれがあって、医局員がアジアの小児科とつながろうという機運が盛り上がり、今でも続いています。とてもいいことだと思います。小林登先生は、国立小児病院に移られてからも、医局員のバックアップをしてくださっていました。

榊原：海外に行って小林登先生の名前を出すと、それだけで喜ばれる。私たちにとって、先生はお天道様のような存在です。人をうまく育てる先生なのです。それも、盆栽を育てるみたいに、ああしろこうしろではなく、いいようにしなさいと言いながら、バックアップはしてくれる。これは人格というか、天賦のものでしかないですね。

私は小林登先生のことは尊敬していましたが、「弟子として尽くします」などと言ったことはないんです。それでも、人とつないでくれましたし、いろいろなバックアップをしてくださいました。多分、先生は多くの人とそういう片務的な接し方をされたのだと思います。自分の牙城を作って、どうだと自慢する教授もいるけれど、そういうところが先生はまったくなかった。超越していたと言うか、自信があたりだったんでしょね。
——小林登先生の医学的な業績というとなんなのでしょう

榊原：まず、新しい免疫学を日本に紹介した研究者の一人だったということでしょうね。ロンドンで免疫病理学を学ばれたので。ただ、実質的には他の業績の方が大きいような気がします。

小林：検索するとたくさんの論文が出てきます。お若い時には、けっこうオリジナルの英語の論文をお書きになられていて、その後は若い人の研究を後押ししていかれた感じでしたね。

榊原：カテゴライズするなら教育者でしょうか。戦後の日本がまだ立ち上がってもいない状態で、みんなが欧米に追いつけ追い越せをやっている。そんな中、アメリカやイギリスで最先端の小児医療を実際に見てきて、さらに一歩先を見据えていたのだと思います。小児医学にとどまらず、子ども全体の未来について考えておられた。

小林：小林先生の言動って、医学者向けというよりも、一般の方々へ向けてのわかりやすいものだという感じがします。それも、単に子どもへの温かいまなざしがあるだけではなく、その優しさの背景にサイエンスを置いていたことは忘れてはならないと思うのです。

それまでの小児科医は、どうかすると医者への権威を利用して、親たちを上から指導する感じがありましたけれど、小林登先生はベースにサイエンスがあるので、権威に頼る必要がなかったのだと思います。

私も「子ども学部」で教えていますし、今は「子

ども学」という言葉は誰でも使うようになりました。けれど、もともと先生は、サイエンスに基づいたものとして「子ども学」を提唱されたわけで、その視点はこれからも大切にすべきだと思います。

榊原：小林登先生が、子ども学会を作られたのは、日本の子ども研究のアカデミズム全般に、どこか物足りなさを感じていたからだだと思います。それを先生らしいやり方で、誰かを批判するのではなく、新たなものをすっと作ってしまわれた。子育てはこうあるべきだという父権主義的なやり方ではなく、サイエンスを踏まえた、開かれた形で。そういう大胆なことを76歳でおやりになったのは、本当にすごいことだと思います。



榊原洋一（さかきはら・よういち）

日本子ども学会理事長。チャイルドリサーチネットワーク所長。医学博士・小児科医。東京大学医学部卒。ワシントン大学小児神経部研究員、東京大学医学部附属病院小児科医長、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授、同大学理事・副学長を歴任。小児科学、小児神経学、発達神経学、神経生化学を専門とし、長年、発達障害児の治療に携わる。著書に『子どもの発達障害 誤診の危機』『発達障害のある子のサポートブック』『よくわかる大人のADHD』など多数。

小林美由紀（こばやし・みゆき）

白梅学園大学副学長・子ども学部教授、大学院子ども学研究科教授。医学博士・小児科医。東京大学医学部卒。東京大学医学部講師、スウェーデンカロリンスカ研究所、東京西徳洲会病院小児難病センターなどを経て、現職に。専門は、小児科学、小児血液腫瘍学、小児保健学など。大学では保育士、社会福祉士志望の学生などに「子どもの保健」、「子どもの障害の理解」などの講義を担当している。著書に『子どもの健康と安全演習ノート』、共著に『保育士等キャリアアップ保健衛生・安全対策』『保育士等キャリアアップ障害児保育』など。

木下 真（きのした・まこと）

日本子ども学会事務局長。福祉ジャーナリスト。一般社団法人障がい者スポーツ・アート・ミュージック振興協会（HANSAM）理事・ディレクター。NHKハートネットTVの番組リサーチやWeb記事の執筆を担当。

小林登「子ども学」賞設立のための 子ども学コロキウム

総括 安藤寿康 (日本子ども学会 研究開発委員会委員長、慶應義塾大学教授)

小林登「子ども学」賞の設立を機に、小林登先生のお考えになった「子ども学」とは”何であったか”、いまその賞にふさわしい研究や活動は”何であるのか”、そしてこれからの子ども学は”何をめざすか”と、子ども学の過去・現在・未来を考えるための催しを、研究開発委員会として「コロキウム」という形で全3回にわたり開催した。

初回は小林登先生と本学会の立ち上げに共に関わった本学会のおなじみの理事4名が登壇し、それぞれ自らの研究が、小林先生のしなやかで先験的な姿勢にインスパイアされて展開した思い出が語られた。第2回は小林先生が子どもたちのために取り組まれた社会実装の事業に関わった3名の方々のお話で、児童虐待、難病、妊娠出産といった子どもやその家族が陥るリスクに対して誰よりも早くその解決のための活動にかかわっていたことを知り、子ども学の実践性を再認識させられた。そして第3回は、学会でも折に触れて振り返って語られる小林登先生とジェーン・グドール博士との交流の思い出もふまえ、霊長類学や進化理論に基づいた子ども研究、さらに近年発展が目覚ましい脳科学といった生命科学的アプローチに携わっている4名の研究者から、これからの子ども学を見据えるような話題提供をいただいた。

この企画は、形式と実質の二つの側面で新しい試みであった。まず形式面として、研究開発委員会としてこれまでも行ってきた「子ども学カフェ」とは異なる形式、すなわち一人の演者による講演会形式ではなく、共通のテーマのもとに集った複数の演者の話題提供によるシンポジウム形式を新たに開始した。いずれも参加者との活発な意見交換の場となるようにしている点では変わらないが、コロキウムのほうが、登壇者同士やフロアからのコメントに触発されて、より深い話題に展開しやすいという印象を持った。

また、こちらが重要だが、その実質的な側面として、小林登「子ども学」賞の設立事業を、単に学会のプレゼンスを高めるイベントにとどめるのではなく、「子ども学」のアイデンティティを、創業者である小林登先生の足跡を紐解き、またその考えに感化を受けた人々の受け止め方や、受け止めたその種を育てようとしている現在の姿を、学会員として共有することで、学会員のそれぞれが改めて自らの営みを、小林登先生の子ども学を鏡に、問い直す機会となったと思う。

私自身の小林登先生との出会いは、NHKで放送された赤ちゃんとお母さんたちに囲まれた小林先生の慈愛深い笑顔と、中山書店のヒューマンサイエンスシリーズで読んだ石井威望先生とのエンタテインメント研究だった。どちらもまだ学部生や大学院生の頃のメディアや書物を通じての間接的な出会いで、研究領域も異なることから、まさかその後、小林先生に直接お目にかかり、先生が設立されようとしていた子ども学会に理事としてかかわることになるとは夢にも思わなかった。だが、こうして小林登先生の研究と実践の幅の広さ、見識の深さを知るだけに、私が小林先生の子ども学に出会ったのは必然であったと言わざるを得ない。

経歴は違えど、同じように感じている学会員は多いのではないかと思う。このことが、まさに子ども学の今後の可能性の大きさを確信させる根拠となるだろう。



安藤寿康 (あんどう・じゅこう)

慶應義塾大学文学部教授。博士(教育学)。専門は教育心理学、行動遺伝学、進化教育学。著書に『遺伝と環境の心理学—人間行動遺伝学入門』(培風館)『日本人の9割が知らない遺伝の真実』(SB新書)、『「心は遺伝する」とどうして言えるのか—ふたご研究のロジックとその先へ』(創元社)、『なぜヒトは学ぶのか—教育を生物学的に考える』(講談社現代新書)、『生まれが9割の世界をどう生きるか』(SB新書)などがある。

「小林登先生とのエントレイメント研究」

渡辺富夫 (岡山県立大学情報工学部特任教授)

新生児が母親との語りかけに対して手足を動かしてリズム同調するエントレイメント研究との出会いは、小林登先生と石井威望先生との共同研究会「母子間コミュニケーション(エントレイメント)研究会」に院生として参加した1978年だった。小林先生が「赤ちゃんはお母さんの語りかけに対して何十万回、何百万回とリズムを合わせて引き込むことで、言葉という文化を獲得している」と話されたことに強く感銘したことを今も鮮やかに覚えている。

ヒューマンコミュニケーション研究の基盤として、この母子間の原初的コミュニケーションであるエントレイメントに着目し、そのインタラクションのメカニズムをヒューマンインタフェースに応用しようと、エントレイメントの不思議さ・重要性に魅了されて早40年以上になる。この間、母子間コミュニケーションから人間コミュニケーションを解析し、うなずきや身振りなどの身体的リズムの引き込みをロボットやCGキャラクタに導入することで、対話者相互の身体性が共有でき、一体感が実感できる「心が通う身体的コミュニケーションシステム」を研究開発して、身体的引き込みの重要性を実証してきた。とくに音声から豊かなコミュニケーション動作を自動生成する技術は、人とかかわるロボット・玩具、メディアコンテンツ、e-Learningやゲームソフト等に導入・実用化されており、教育・看護・福祉・エンタテインメントなど広範囲な応用が容易に可能である。

エントレイメントを根幹とする身体的引き込みによる一体感や共有感、幸せな気持ちや安心感を支えるもので、人がつながるヒューマンインタフェースの要である。コレキアムでは、小林先生とのエントレイメント研究を基盤としてシステム・技術を紹介した。



渡辺富夫 (わたなべ・とみお)

1955年三原市生まれ。1983年東京大学大学院博士課程修了。工学博士。同年山形大学工学部助手、講師、助教授を経て1993年岡山県立大学教授、現在、同名誉教授、特任教授。ヒューマンインタフェース、身体的コミュニケーション研究に従事。日本機械学会設計工学・システム部門業績賞・功績賞等受賞。JST CREST研究代表者(2回)、ヒューマンインタフェース学会会長(名誉会員)などを歴任。

小林登「子ども学」賞 設立のための子ども学コロキアム

●第1回 2021年6月20日(土) 13:30~16:30

[テーマ] 小林登先生の足跡と子ども学研究を振り返って

榊原洋一 (お茶の水大学名誉教授)

「小林先生の上には青空が見えた」

竹林洋一 (静岡大学創造科学技術大学特任教授)

「小林登先生は人間社会を包括的に捉える人工知能学の先駆者だった!」

木下 真 (福祉ジャーナリスト)

「学際研究の動機 ~子どもを探究し、人間を明らかにする~」

渡辺富夫 (岡山県立大学情報工学部特任教授)P.11

「小林登先生とのエントレイメント研究」

●第2回 2021年12月25日(土) 13:00~16:00

[テーマ] “危機にある子ども”を守るシステムをつくる
—小林登先生と子ども学—

唐澤 剛 (社会福祉法人サン・ビジョン理事長)P.12

「児童虐待防止対策の草創期と小林登先生」

小林信秋 (難病のこども支援全国ネットワーク顧問)

「小林登先生の思い出」

福澤利江子 (筑波大学医学医療系助教)P.12

「ドゥーラを日本にもたらした小林登先生の思い出」

●第3回 2022年6月26日(日) 13:00~16:00

[テーマ] 子ども学の可能性 —生命科学との接点

林 美里 (中部学院大学教育学部准教授)P.13

「大型類人猿の発達と子育て」

島田将喜 (帝京科学大学准教授)P.13

「動物の遊びと社会・進化」

橋彌和秀 (九州大学教育学部・人間環境学研究院 人間科学部門教授)

「『子どもへのまなざし』を相対化する方法論としての
実験発達心理学」

仁木和久 (慶應義塾大学大学院社会学研究科訪問研究員)P.14

「『子どもは未来である』とは?
—『学びと成長』と『社会・文化』との関係を脳に探る」

コーディネート

安藤寿康 (日本子ども学会 研究開発委員会委員長)P.10

「児童虐待防止対策の草創期と小林登先生」

唐澤 剛 (社会福祉法人サン・ビジョン理事長)

私が小林登先生に初めてお目にかかったのは、厚生労働省雇用均等・児童家庭局の家庭福祉課長に就任した平成14(2002)年の8月の頃でした。この頃の家庭福祉課は、多忙を極めていました。国会に提出はされたもののほとんど審議されていない母子寡婦福祉法改正案への対応、母子家庭支援対策、児童養護対策、DV防止法の見直しなど多様で複雑な課題を抱えており、こうした難題に加え、平成12年に施行された児童虐待防止法の見直しという課題があったのです。

当時は、児童虐待という言葉に社会の関心は高まりつつあったものの、その内容や対策に関する理解などは十分ではなく、一般市民に限らず、行政や福祉関係者も含め、広く研修を行うことのできる研修機関が求められていました。こうして、平成14年に子どもの虹情報研修センターが誕生し、小林登先生が初代センター長に就任されたのでした。

小林先生が英国での経験を綴られたエッセイの中に、子どもは私たちの虹であり、未来であるとお書きになられていたものを拝見して、感銘を受けたことを覚えています。この時の児童虐待防止対策の見直し、社会的養護の対策などの経験が、周辺の支援環境が失われた状態での今日の子育ての困難さや新たな子育て支援の必要性について、私が理解を得る大きな契機となりました。以来、子育て支援のお話をさせていただく折には、子どもは私たちの未来の虹であるというフレーズを借用させていただいています。

小林先生と多くお話する機会はありませんでしたが、いつも柔和に微笑んでいらっしやっただことが忘れられません。



唐澤 剛 (からさわ・たけし)

1956年長野県生。1980年早稲田大学政治経済学部卒業・同年厚生省に入省。1997年介護保険制度準備室次長、2002年厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課長、2003年保育課長、2014年保険局長、2016年6月～2018年8月まで内閣官房まちひとしごと創生本部地方創生総括官。2018年10月より佐久大学客員教授。2021年6月より社会福祉法人サン・ビジョン理事長。2021年6月より公益社団法人日本認知症グループホーム協会副会長。

「ドゥーラを日本にもたらした小林登先生の思い出」

福澤利江子 (筑波大学医学医療系助教)

ドゥーラとは「他の女性を助ける経験ある女性」という意味の古いギリシア語で、妊娠・出産の時期にある母親とその家族に、情緒的・身体的支援や情報提供などを継続的に行う非専門職です。妊産婦さんに付き添い、傾聴したり、共感したり、励ましたり、意思決定を支えたり、わかりやすく説明したりします。もともとは古くから世界各地の文化に根差して続いてきた女性同士の助け合いですが、多くの優れた研究により様々な効果が証明され、1990年代以降は新しい職業として発達しています。

世界で初めてドゥーラを紹介したのは米国の医療人類学者 Dana Raphael 氏でした。小林登先生は1970年代後半というとても早い時期に Raphael 氏の著書に出会い、日本の小児科医・産婦人科医の雑誌などを通して熱心に紹介されました。下記はその一部です。

「わが国のような急速に変化した社会状態にあっては、実情に応じたドゥーラ組織を整備しなければならない。ドゥーラを個人的なものから社会的なものに拡大する必要がある。拡大されたドゥーラ組織の中では、小児科医の果たす役割は大きい。(中略) 育児というものも、新しい医学の方法論での検討が必要であろう。(中略) 現在の社会情勢に対応して育児の本質を再検討すべきときに来ている。」(1977年「ドゥーラとしての小児科医」より)

「豊かさを支える科学・技術を否定してはならないが、それを今取り込み乗り越える必要がある。ドゥーラのような考えも取り入れて、パラダイムを大きく変え、21世紀を「心」の時代、「人間」の時代にしなければならないことだけは明らかである。」(2004年「上海の導楽」より)

ドゥーラのエモーショナルサポートは、心の時代における「優しさの科学」です。今回の子ども学コロキウムでは、ドゥーラについて小林先生が遺された多くの言葉を科学的根拠と共に紹介し、子ども学においてはドゥーラを「哺乳類の生存と繁栄の鍵」と位置づけることを提案しました。



福澤利江子 (ふくざわ・りえこ)

助産師、国際認定ラクテーションコンサルタント、筑波大学医学医療系助教、チャイルド・リサーチ・ネット「ドゥーラ研究室」運営。

「大型類人猿の発達と子育て」

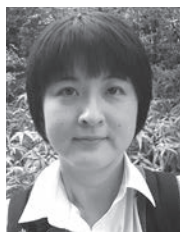
林 美里 (中部学院大学教育学部准教授)

ヒトの子どもの発達と子育てをより深く知るため、ヒト科に分類される大型類人猿を対象とした比較認知発達研究から得られた知見を概観した。

まず、種間比較の指標として、物の操作に着目した研究を紹介した。西アフリカ・ギニア共和国・ボツワナの野生チンパンジーは、1組の石を台とハンマーにしてナッツを割る道具使用をする。ナッツを割れるのは3歳半以降で、熟練にはさらに時間がかかる。積極的な教育は非常にまれだが、母親が子どもに寛容で常に手本を見せ続け、子どもが自発的に興味をもち学習が進む。チンパンジーの場合、特に母子関係が初期発達の基盤となるが、それを取り巻く社会全体も、ゆるやかに母子関係をサポートする機能を果たす。生後1年ほど母子が密着してすごし、5年ほどで離乳が完了して自立が進む。母親に守られて集団の中でくらすことで、種特異的な行動や社会性が獲得される(チンパンジーの子育ての詳細は、本誌24巻の「論考」を参照)。

チンパンジーの近縁種ボノボでは、移籍してきたメスが特定の年上メスと行動を共にして協力するなどして、女性優位で平和的な社会を形成する。ゴリラは、シルバーバックと呼ばれるおとなオスを中心としたハーレム型の集団でくらす。父親が明確なため、父親も子育てに一定の役割を果たす。ただし、シルバーバックの交代や、子連れメスの移籍により子殺しが起こることもある。オランウータンは単独性が強く、母子以外はゆるやかな社会関係しかない。母親が複数の子どもを育てることが難しく、7~8年という長い養育期間を経て子どもが自立する。

ヒトは父親や祖父母だけに限らず、血縁がなくても積極的に協力や支援をおこない、同時に複数の子どもを育てることができる。過剰な教育よりも、子どもの育つ・伸びる力を信じるとともに、母親が気軽にサポートを求められる社会的つながりをもつなど、大型類人猿の子育てから私たちヒトが学ぶべきこともある。



林 美里 (はやし・みさと)

中部学院大学教育学部准教授。公益財団法人日本モンキーセンター・学術部長。京都芸術大学文明哲学研究所客員准教授。霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院の分担者。飼育下と野生の両方でチンパンジーをはじめとした大型類人猿を観察し、人間の子どもの発達と、大型類人猿の子どもの発達とをくらべる比較認知発達の視点から研究している。分担執筆に「わらべうたと心理学の出会い」(湯澤美紀編著、金子書房)など。

「動物の遊びと社会・進化」

島田将喜 (帝京科学大学生命環境学部准教授)

「ホモルーデンス」とは、J. ホイジンガが提唱した「遊ぶ者としてのヒト」を意味する概念である。遊びが人間存在にとって重要な活動だということは、プラトンや孔子の時代から知られていたが、遊びを対象とした学際的・実証的研究が進化したのは、ごく最近のことである。

動物行動学では遊び行動を、移動運動遊び、対物遊び、社会的遊びの3つに分類する。真獣類全体で見ると、ほぼすべての系統から遊び行動が見出され、その進化史的起源が極めて古いことは確実である。

ヒトにもっとも近縁な現生の動物の一種であるチンパンジーの遊び行動には、想像力を用いた遊びなども豊富に見いだされ、ヒトと共有する要素が多い。しかし遊びの集団形成に着目すると、ヒトでは大勢が同時に遊びに参加しその状態が長時間持続するが、チンパンジーでは2個体間の遊びが個別に持続することで集団が大型化するという違いがある。社会的遊びにおいて、相互の関係性のみがバランスし、接触遊びに偏り、また恣意的規則を共有しない、といったヒトとは異なる特徴をもつために、チンパンジーでは大型の遊び集団が安定しないと考えられる。

ホモ属は、その出現時にはすでに100名を超える大集団を形成して生活していたと推定されている。大集団での生活ではメンバー間の親和的交渉の積み重ねが必要であり、霊長類は社会的毛づくろいを交わすことで関係性維持に努める。しかし、180万年前ころに出現したホモエレクトゥスは体毛の多くを失い「裸のサル」になりつつあったと考えられている。無毛化した彼らは他の手段を用いて親和的関係性維持を達成したはずであり、その手段こそが遊びであったとする「遊びの紐帯維持機能仮説」を、私は提唱する。

Pan属との共通祖先から分岐して以降の人類の系統は、大型の遊び集団を長時間持続させられた。ヒトはまさにホモルーデンスとして進化し、現在に至っているのである。



島田将喜 (しまだ・まさき)

京都大学大学院理学研究科生物科学専攻 博士後期課程修了。博士(理学)。帝京科学大学生命環境学部講師を経て、現在は同大准教授。専門は霊長類学、人類学、遊び論。著書に『遊びの人類学ことはじめ: フィールドで出会った〈子ども〉たち』(2009, 昭和堂, 分担執筆)などがある。複数の野生霊長類に対する長期フィールドワークを通じて、人類の進化史を「遊びの社会ネットワーク」の観点から捉えなおす研究を継続している。

「子どもは未来であるとは？」

～『学びと成長』と『社会・文化』との関係を脳に探る～

仁木和久 (慶應義塾大学社会学研究科訪問研究員)

「子どもは未来である」という本で、小林登先生は小児科医の視点から「子どもが生物的存在として生まれ、1歳で社会的存在としての第2の誕生という飛躍を遂げる」ことを詳細に述べられている。本講演では、脳科学の視点から、社会・文化的存在へと飛躍する子ども達の心の発達を、それを支える脳 (Enactive Brain) の構造と機能の発達として紹介することで、「子どもは未来である」の含意を皆様と一緒に考えてみたいと思います。

我々は、主体的な「意図をもった行動 (= 行為)」と「学びと成長」を支えている人間の脳を研究しており、3つの「脳の原理」¹⁾ (固有の機能と自律的神経活動をもつ脳システムで構成、自由エネルギー最小の原理、ホメオスタシス原理) に従い Enactive Brain 理論・モデルを構築し、教育における「学びと成長」を脳科学的に解明することを目指しています。「自己情報と記憶の脳システム」、「論理的推論の脳システム」、「顕著性&恒常性の脳システム」と重要な感覚である視覚・聴覚の背側路と腹側路から構成されている Enactive Brain は、生まれながらの子どもが、環境を認識し環境対象に能動的に働きかけることを未熟ですが可能にします。しかし、驚いたことに、赤ん坊が、最初に行う重要な仕事は、生物的存在としての成長ではなく、「母子間の愛着と情動コミュニケーションの形成」という社会的存在の基盤機能である「社会的情動システム」の形成のようです。

社会的情動システムは、Enactive Brain の「脳の原理」に従って、心臓の鼓動に関する自律神経情報から形成した内部モデルを用いた予測器を使って、島皮質や内側前頭葉下部に形成されます。赤ん坊は、母親に抱かれ授乳を受けながら、母親の心臓の鼓動に「安心と幸福」を感じている筈です。母子は、この社会的情動システムを使い社会的ニッチを形成し、親子の交流の中で子どもの認知的発達を促します。

知覚の発達などに引き続き、1歳頃に「最初の語彙発声」という感動的なイベントが起こります。この語彙発声は、この社会的ニッチの中で、母親のマザーリング発声動作を模倣しようとする赤ん坊の行動として起こります。これを可能にする Enactive Brain の機能の発達を探ると、環境の中で環境対象に働きかける機能としての予測器の形成に始まり、知覚機能が出現し、10ヶ月頃に、他者の行動の観察により他者の行動意図を理解しその行動を自分で実行可能にする「ミラー

ニューロン」が現われ、その直後に、語彙発声が始まります [我々は、予測器によりミラーニューロンも知覚も形成されると提案します]。この語彙発声は、言語システムの一部の始動に過ぎず、Enactive Brain の中では、語彙音声分析機能、記憶システム、感覚的概念と概念システムの発達等が進行しています。

Enactive Brain の構造と機能の変化をさらに追うと、1歳～14ヶ月にかけて、語彙音声に係わる背側路がブローカー野後部 B44 に繋がり、B44 の語彙概念システムを中核とする言語システムが完成します。他者から聞いた語彙と自ら発話する語彙を「同一」語彙として使う双方向性の言語システムは、人間固有であり、社会に共有された情報を利用することを可能にします。さらに、我々の行為は語彙表現された意図目標を持つため、言語コミュニケーションをし、相互に意図目標を更新する社会的協調活動ができるようになります。この語彙概念システムを中核にし、言語システムと行為システムが連動して機能し始める1歳頃が、子どもの社会的存在として第2の誕生であると Enactive Brain は示唆しています。その後、子どもは社会の中で「学び、成長」し、社会文化の構築活動の輪の中にいる存在になります。

それが、「子どもは、未来である！」の含意だと思います。しかし、現在の日本の子どもは教育の中で「心の健康」が損なわれているといえます。学びの社会環境の再構築が、子どもの未来、日本の未来の為に必要不可欠だと問題提起をします。

〈参考文献〉

- 1) 仁木和久:人間の学びと成長, Well being を支える3つの「脳の原理」, チャイルドサイエンス vol.23, p10-12



仁木和久 (にき・かずひさ)

慶應義塾大学社会学研究科訪問研究員。東京大学工学部卒。東京大学論文博士(工学)取得。工業技術院電子技術総合研究所を経て米国CMU訪問研究員。JST戦略的創造研究プロジェクト「脳科学と教育」で研究代表をつとめ、現在、科研費挑戦的研究(開発)「主体的・能動的な学び(アクティブ・ラーニング)」の脳認知科学アプローチによる研究を行っている。近著に『学びの行為を支える脳を知り、学びと教え、教育を考える』(in「主体的学び」7号、主体的学び研究所、2021.8)ほか。



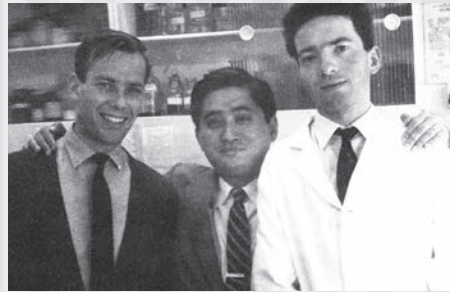
Album

在りし日の 小林登先生

赤ちゃんと小林先生。まずは笑顔で「こんにちは」。



小児免疫学の若き研究者。



イギリス留学時代の小林先生(中央)。ロンドン大学の研究室にて(1960年代初め)。



イギリスの霊長類学者ジェーン・グドール博士と。1982年に日本へ招聘して以来の友人。



第17回国際小児科学会に会長として登壇(1983年11月、マニラ)。



国立小児病院院長としてイギリスのダイアナ妃をお迎えた(1995年2月)。



「子どもに明るい未来を」。子どもの虐待防止「オレンジリボンたすきレー」に参加(2007年)。



国立小児病院の院長室で。